The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『諸法実相抄』の研究
——書誌学的な観点から——

ジッリオ・エマヌエーレ・ダヴィデ

はじめに

本研究は『諸法実相抄』（以下『実相抄』）という、日蓮に帰せられる消息一通に集中し、その起源と原型を探ろうとする書誌学的な研究を中心としたものである。

『実相抄』は最蓮房（生没年不詳）という元天台僧に宛てられたと伝えられる遺文一二通の一つであり、現在は十五世紀後半の写本でしか伝わっていない為、日蓮真筆の資料が現存する「真蹟遺文」（またの名は「ご真筆」）とは違い、「写本遺文」として数えられている。

今の日蓮教学では、「写本遺文」に対する研究が少なく、その研究方法もまだ確定していないと思われる。その理由は、「写本遺文」は日蓮真作かどうかについて簡単に断言できない（いわゆる日蓮遺文の「グレーゾーン」に該当する）ためである。それに伴い、日蓮自身の思想を明らかにしようとする際、「真蹟主義」という態度が主流になっているが、「真蹟遺文」しか研究されないことが多くなると、「真蹟」の概念は硬直化した絶対的な基準になってしまう恐れも生じる。

一　資料の問題

本研究の際、筆者は一五世紀の写本の時代へ、『実相抄』に関して現存する最古の資料へと遡ってみた。しかしながら、戦後の編纂『昭和定本』（以下『定』）[1]よりも、特に「写本遺文」一通について写本の時代まで遡って研究を試みるのは珍しいことのようである。その理由とは、今まで宗門と日蓮教学では、遺文に関する最新の増訂版を前提に昔は注釈、現代は研究を行っていくという「伝統」があるからである。

なぜこの様な伝統ができたのか。それは、最新版の遺文集というものは何百年間に渡る多くの人物の努力と、それ以前の増訂作業の流れを受け継いで権威があり、『定』の場合も今の研究者たちの学派を体系化した先代の巨匠たちが作ってこられたものだからだと思われる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

しかし、「真蹟遺文」の場合は少なくとも（ア）日蓮真筆の資料、（イ）直弟子や孫弟子の個別写本、（ウ）室町期以後の写本、（エ）江戸期に行われた刊本が残っているのと違い、「写本遺文」の場合は（ウ）と（エ）のみが残されるだけであり、各時代によって遺文に様々な変化が起きたと考えられる。筆者は『実相抄』を三つの版、即ち一、身延山久遠寺第一一世・日朝が一四八〇年に行った『録外合本』（以下『朝外』）所収の版[2]、二、一六四九年に京都平楽寺で行われた刊本『他受用御書』（以下『受』）所収の版[3]、三、『最蓮房御返事』の別題で、一六六九年に京都平楽寺で行われた刊本『録外御書』（以下『刊外』）所収の追伸[4]、要するに室町期の写本を一つ、江戸期の版本を二つ書き起こし、特徴と相違を調べた。これを通して次の二点が確認された。

二　『実相抄』の資料上の問題

一、『実相抄』は各時代によって形と内容が大きく変わっている。特に江戸期に行われた刊本では、削除と付加と思われるものが豊かである。具体的な例をいくつか挙げる。

（ア）刊本の時代・江戸期になると、大きな一部が削除され、一九〇四年の編纂『縮冊御遺文』（以下『縮』）[5]を除いて、後の遺文集には二度と現れてこない。この大きな部分に関して浅井要麟氏は「この書の後段に数行の錯簡が竄入している。即ち縮刷遺文九六三頁六行目の「穀物も又々かくの如し」以下「くはしく語らせ給へ」に至る文がそれである[6]」と、『縮』しか取り上げていない。浅井氏は話題の数行を元々含んでいる一四八〇年の『朝外』を見ていないのが明らかであろう。宮崎英修氏もこの点に関しては浅井氏の考察をただ繰り返している[7]。

最近、池田令道氏は、江戸期に『受』を刊行した人たちはなんらかの理由によってこの数行に違和感を持ったため省略したと推測し、これは逆に『実相抄』の文献的価値を疑わせると指摘するが[8]、筆者は江戸期になって宗門はこの数行に違和感を抱いたとしても、なぜその二百年前の日朝は同じ違和感を抱くことなく『実相抄』の中身を恣意に操作しなかったのかという問題も孕んでくると考える。

（イ）同じく刊本の時代になると、小さな付加が多く行われ、後の編纂のすべてにそのまま残っているものが多い。「凡夫本仏説」のような発想が見られると言われている箇所[9]だけを見ても、『朝外』に「胸中ニシテクラシ給ヘリ其レモ道理ナリ」だった文は『受』には「胸中ニ思ヒメクラシ給フ夫モ道理也」に、「天台傳教妙楽等」は「天台　妙樂　傳教等」に、「上首上行無辺行等ノ菩薩」は「上主〇唱首上行無邊行菩薩等」に、「法躰ノ妙法蓮花経」は「妙法蓮華經ノ五字」に、「俱躰俱用」は「俱躰俱用ノ三身」へと変わり、「此釈ニ本佛ト云ハ凡夫也迹佛ト云ハ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

佛也」の文は初めて『受』に付加されることが窺える。[10] 元々『朝外』に問題があったか、これらの操作によって本文の意味に本質的な変化が伴うかどうかについては、これから検討すべきところである。

（ウ）一四八〇年の『朝外』において『実相抄』の追伸だったものが何故か一六六九年（『刊外』の刊年）の時に『最蓮房御返事』という別題で個別に伝えられるようになり、後に[11]『十八円満抄』という別の遺文の追書と意識もされてしまい、一八八〇年の編纂『高祖遺文録』（以下『高』）にはまた『実相抄』の追書に戻された。

浅井氏はこの追伸に関して「「實相鈔」の副書としては、本文の末尾の文と重複して首肯し難いものである」と書いているが、重複しているところを明らかにしない以上、その主張は『実相抄』の追伸が一六四九年の『受』と後の編纂のように本文に続いて最後のところに出てくるのを前提にしている。しかし、最も古い資料である一四八〇年の『朝外』では、本文の前に出ている。

宮崎氏もこの点に関して、一八八〇年の『高』を取り上げて、「最後の追伸は、元来「十八円満鈔」の追伸であったものを「諸法実相鈔」につけたものである」と、『実相抄』の追伸は一四八〇年の『朝外』に見られるように元来『実相抄』のものであったという事実を見逃している。宮崎氏も江戸期以前の資料を見ていないのも明らかであろう。

同じく宮崎氏はさらに『実相抄』自体について一六四九年の「『他受用御書』にはじめて収録されたものである」と、一四八〇年の『朝外』に収録されている事実まで見失っている。これは、宮崎氏は戦後の『定』を前提に考え、『定』に『実相抄』の起源についてはもはや最古の収録として「【刊】受2[12]」としか記録されていないからであろう。

一、については以上で、『実相抄』は集成と時代によって大きく変化し、現代に知られる形勢に至ったということが確認できる。そしてこの現象は日蓮遺文全体に関して起きているかどうかはこれから確認すべきところである。

二、「写本の時代」に続く「刊本の時代」も終わり、明治期に迫ると一八八〇年の『高』のような「編纂の時代」となる。明治期から現代まで作られてきた遺文集は殆ど以上の様な削除と付加と思われるものが豊かに行われた江戸期の刊本を前提に編纂され、それ以前の資料を詳しく見ていないと思われる。一八八〇年の『高』は江戸期の刊本を前提とする資料をもとにし、戦後の『定』は一九〇四年の『縮』にも目を通しているようだが、『高』をもととしていると思われる。その結果、最新版の遺文集を前提に研究を行うという「伝統」がそのまま続けば、遺文の起源と原型が失われていく恐れが高いと言えよう。『実相抄』の場合はまさにその一例である。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

終わりに

日本で行われている日蓮遺文の研究は主な「ご真筆」の内容との理論的整合性の有無の確認を基準に、たまに「写本遺文」を疑いつづける。[13] これに対して筆者は一筋縄では行かない日蓮の思想的な豊かさをもう少し考慮すべきだとも考えるが、まず「資料の問題」は特に大きいと見ている。日蓮自身の思想に遡ろうとし、「写本遺文」の正体もより正確に把握しようとするならば、最新版の遺文集を前提に研究を行っていくという、今までの「伝統」を再考する必要があり、遺文に対してはまず第一歩として資料論や書誌学的な研究を本格的に行っておくのも必要不可欠であろう。それがなければ、どのような文献学的な及び思想的なアプローチを試みても、的外れに導いてしまう恐れがある。

1　立正大学日蓮教学研究所編『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻、総本山身延久遠寺、昭和二七年。
2　日朝本『録外合本』第五巻、第九七通、身延文庫、総合本山身延山久遠寺、文明一二年。
3　『他受用御書』第二巻、京都平楽寺、慶安二年、一一～一六丁。
4　『録外御書』第五帙、第二三巻、平楽寺法華宗門書堂、京都、寛文九年、一六丁。
5　霊良閣版『日蓮聖人御遺文』縮冊遺文、山喜房佛書林、東京、明治三七年。
6　浅井要麟編『昭和新修日蓮聖人遺文全集』別巻、平楽寺書店、京都、昭和九年、二二〇頁。
7　宮崎英修著「最蓮房伝再検」（立正大学日蓮教学研究所編『日蓮教学とその周辺』山喜房佛書林、東京、平成五年）二〇九頁。
8　池田令道著「身延文庫蔵　日朝本録内・外御書の考察」（大黒喜道編『興風』第二一号、興風談所、岡山、平成二一年）三三六頁。
9　北川前肇著『日蓮教学研究』平楽寺書店、京都、昭和六二年、一一頁、六八一頁、六九八頁。末木文美士著『日蓮入門―現世を撃つ思想』ちくま新書、東京、平成一二年、一八四～二〇二頁。
10　『朝外』所収の『実相抄』の四頁から七頁まで。『受』の一一丁ゥから一二丁ゥまで。『定』の七二四～五頁。
11　小川泰道編『高祖遺文録』第二九巻、身延山久遠寺、明治一三年、二九丁目ゥ。
12　『定』第一巻、七二三頁。
13　宮崎英修編『日蓮辞典』東京堂、東京、昭和五三年、一四二頁。

〈キーワード〉　日蓮遺文、写本遺文、『諸法実相抄』

（東京大学大学院）

NII-Electronic Library Service